
辻内家の猫

辻内英祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辻内家の猫

【Zコード】

N4056A

【作者名】

辻内英祐

【あらすじ】

兄が拾ってきた猫はコールターに塗れて、弱った子猫でした。

手袋、マフラー、コート…自転車で帰宅する完全防備の高校生。冷たい風に顔をしかめながらも、ぐんぐんスピードを上げていきます。

「とにかく、早く家に帰りたい。」

ゴールタールに塗れ、ガリガリに瘦せた子猫を兄が拾ってきたのは、そんな寒い冬の日のことでした。

学校からの帰り道、車道を叩叩叩と歩く子猫を見つけた兄は、可哀相に思つて、拾つたのだといいます。

部活で使うタオルで子猫を包み、自転車の前カゴに乗せて帰宅した兄は、炬燵でぬくぬく、テレビを見ていた僕を呼び出して、その子猫を洗うように言つ付けると、僕と交代で、炬燵でぬくぬく、テレビに熱中し始めました。

僕の兄は、とても優しい男なのですが、反面、非常に無責任な所がありました。いくら文句を言つても、一向に聞き入れない事は、目に見えていたので、仕方なく、その猫をタオルに包んだまま風呂場まで運んでいきました。

洗う前に、何か食べさせいやうつと思い、水で薄めたミルクと魚の缶詰を紙皿に入れて子猫の前に置くと、物凄い勢いでミルクを、ちやぱちやぱ、舐めはじめたので、一先ず安心しました。

兄が、猫を拾ってきたことは、この日が初めてではありますんでした。

弱った猫を見つけるとすぐにつれて帰つてくるので、その度に僕が猫の面倒を見ていました。

ミルクも缶詰も平らげた子猫は、泣き声も目も、しつかりとしてきたので、もう大丈夫だらうと思い、シャワーの湯加減に注意しながら、シャンプーでゴシゴシと洗つてやりました。

いくら洗つても毛にこびり付いたコールタールは取れず、諦めて、シャワーを嫌がる子猫をタオルでふいてやつて、浴室の扉を開けると、物凄い勢いで、浴室から逃げ出したりで、もうすっかり元気になつたなあと思いました。

逃げた子猫を捕まえて、ガスヒーターの前で半乾きの毛を完全に乾かすと、こびり付いたコールタールを少しづつ、慎重に、ハサミで切り取つてやりました。

その作業は深夜まで続き、所々、こびり付いたコールタールが残っているものの、努力の甲斐あって、最初より、数段キレイになりました。

した。

そうして数週間たつと、汚れた毛が生え変わり、コールタールもすっかり取れて、あの弱弱しいガリガリの子猫の面影は、完全に無くなっていました。

二

椅子の上でだらしなく眠っている猫は、とても太っています。

暫らく、家で面倒を見ていると、大分元気になつたので、野良に戻してやるひつと、庭に放したら、勢い良く田んぼ道を走つていったので、やっぱり野性が一番なのだなあと思つて猫の後ろ姿を見送つたのですが、その夜、外で”ニャーニャー”と猫の泣き声があるので、窓を開けると、あの猫が窓から、スルツ、と家中へ入つてきました。

どうしても夜になると家に帰つてくるので、野良に戻すのは諦めて、その猫は辻内家で正式に面倒見ることになりました。

辻内家で甘やかされて育てられた猫は太りました。その太った猫を、父と祖母は”ミーちゃん”と呼び、母は”ミーコ”と呼び、兄は”ブーさん”と呼び、俺は単に”猫”と呼んでいました。
どの名前を呼ばれても、特に反応を示すことはなく、”ロロロロ”と、椅子の上で、いびきをかけて、眠っていました。

頭を触つても、お腹をくすぐつても、気怠そつに半田を開けて、また閉じるといった反応しか示さず、まったく、鈍感で倦怠な猫だなあと思いました。

ある日、僕が玄関の扉を開けた時に、猫が外へ飛び出していきました。

田んぼ道をぐんぐん走つていく猫の後ろ姿を見送つて、また、夜になれば帰つてくるだろうと思っていたのですが、その日の夜も、次の日の夜も…そして、とうとう、その猫は家に帰つてはきませんでした。

三

梅雨入りして、ジメジメとした毎日が続き、洗濯物はまつたく乾きません。仕方がないからカッターシャツや体操服など、明日必要なものだけを取り入れて、ガスヒーターで乾かしていると、ふと、あの猫の事を思い出したのです。

猫は死期を悟ると、飼い主の前から姿を消すといった迷信を聞いたことがあります。僕は、何となくですが、あの猫は、まだどこかでたくましく生きているような気がするのです。

体操服をガスヒーターで乾かしていると、兄が帰つてきて、おーい、と僕を呼びました。

「この猫、汚れてるからキレイに洗つてやつて。」

生乾きの体操服とカツターシャツを椅子の背もたれに掛けると、僕はタオルに包まれた猫を優しく風呂場まで運んでいきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4056a/>

辻内家の猫

2010年12月18日20時22分発行